

研究奨励交付金（データサイエンス研究） 報 告 書

令和3年度採択分
令和4年5月31日作成

研究課題名（和文）

教育効果の高いオンライン授業運営に関する研究

研究課題名（英文）

The Management of Online Lessons to Achieve a High Educational Effect

研究代表者

氏 名 柴田 雅博
福岡県立大学 人間社会学部・講師

研究組織

氏 名	所属研究機関・部局・職	役割分担（研究実施計画に対する分担事項）
柴田雅博	福岡県立大学 人間社会学部・講師	研究統括 オンライン授業の実践事例調査 オンライン模擬授業
増満誠	福岡県立大学 看護学部・講師	オンライン授業の実践事例調査 オンライン模擬授業
中本亮	福岡県立大学 看護学部・助教	オンライン模擬授業
石崎龍二	福岡県立大学 人間社会学部・教授	オンライン授業の実践事例調査
河本恵美	福岡県立大学 人間社会学部・講師	オンライン模擬授業

研究奨励交付金（配分額）

¥414,765円

研究成果の概要（当該研究期間のまとめ、できるだけ分かりやすく記述すること。）

2020年度からのCOVID-19の影響により、オンライン授業の需要が急速に高まった。国立情報学研究所（NII）でも定期的にオンラインシンポジウムが開催されオンライン授業対応などの発表がなされている。昨年度に引き続き発表内容を分析したところ、内容としてはDXや具体的なツール開発などに話題の中心が移行していることが窺えた。

一方、我々は昨年度よりオンライン模擬授業を実施し、受講のしやすさや理解のしやすさなど、受講者側の意見を収集すべく実験準備を進めてきた。今年度は5名の学生に研究協力してもらい、2022年3月にオンライン模擬授業の実施実験を行い、受講者側からの貴重な意見を得ることができた。

研究分野／キーワード

オンライン授業、COVID-19

1. 研究開始当初の背景

2020年の新型コロナウイルス（COVID-19）の蔓延以降、企業のテレワーク、大学を中心とした各学校でのオンライン授業が急速に広まってきた。2020年度は4月から5月、1月から2月にかけて日本各地で緊急事態宣言が発令され、本学でも4月から5月にかけて全面オンライン授業を実施せざるをえなかった。1月から2月にかけての緊急事態宣言では学校の休講要請はなく面接授業を継続できたものの、2021年度に入って変異株の流行などにより5月12日から福岡県でまた緊急事態宣言が発令され、6月20日に解除されるまで、本学でも大部分の授業がオンラインで実施された。また、本学でPCR陽性者が出た後一時期授業がオンラインとなり、また同時期に行われた定期試験が全面オンラインでの実施となった。そのほか、面接授業を行う場合であっても希望する学生はオンラインで受講できるように面接免除措置を取るなど、面接授業とオンライン授業の柔軟な切り替えが要求される状況が続いていた。2021年度よりワクチン接種が始まり、COVID-19の影響は一時期ほどの混乱状態と比べればだいぶ落ち着きを取り戻したように見えるがまだ予断を許さない状況であり、授業のオンライン対応を続ける必要があった。一方、この事態をきっかけに、教育ICTソリューションの導入や平時でのオンライン授業継続など、今後の教育や授業運営に変革をもたらすことも期待でき、教育効果の面からもオンライン授業の可能性を図る必要があった。

2. 研究の目的

昨年度の研究では、オンラインシンポジウムに積極的に参加し、COVID-19の蔓延に伴う他大学のオンライン授業への取り組みや導入や運用に関する課題について情報収集と分析を行い、その成果を福岡県立大学人間社会学部紀要にまとめた。また、学生の研究協力者を募りオンライン模擬授業を実施して、学生の受講実態や学生側の意見を踏まえて、教育効果の高いオンライン授業の実現を検討すべく実験準備を進めた。ただし、オンライン模擬授業については、研究協力者の募集時期と1月の緊急事態宣言とが重なったこともあり、研究協力してくれる学生の参加者が集まらず昨年度は実験実施には至らなかった。

今年度は、昨年度に引き続き他大学等のオンライン授業の取り組みに対する実践事例、それに伴うDXなどのICT導入の情報収集分析を行う。また、昨年度実施できなかったオンライン模擬授業実験について、実施計画を再検討して実験を実施し、教育効果の高い授業の実現（座学、語学教育やアクティブラーニングへの活用など）を検討する。これにより、今後のウィズコロナ、アフターコロナにおける大学のオンライン授業の在り方を考え、スムーズな授業運営、教育効果の高いオンライン授業の実現の検討を目的とする。

3. 研究の方法

（1）オンライン授業運用についての他大学の情報収集と分析

国立情報学研究所（NII）では、昨年度より継続して今年度も月2回のペースでオンラインシンポジウム（『教育機関DXシンポジウム』， <https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/>）を開催しており、各学校でのオンライン授業実施の事例報告などが発表されている。昨年度に引き続き、こちらのオンラインシンポジウムの発表内容を分析し、オンライン授業の教育効果、導入したICTソリューション、オンライン授業のメリット・デメリット、実施に対する課題、考えられるトラブルなど

をまとめ、今後のオンライン授業のあり方、進め方について検討する。

(2) オンライン模擬授業の実施調査

オンライン授業にもオンデマンド型授業、リアルタイム双方向型授業、ハイブリッド授業など様々な形態がある。2020年度当初は授業の実施そのものが喫緊の課題であり、各教員は自分の運営可能な形でのオンライン授業を模索してきた。それからしばらく経ち、オンライン授業のノウハウもある程度整ってきたと思われる。そこで、教員の立場から授業の運営方法を考えるだけでなく、実際に受講する学生の目線も必要であると考え。学生の研究協力者（8名を想定）を募り、座学授業、アクティブラーニング授業について、オンデマンド型あるいはリアルタイム双方向型でオンライン模擬授業を行い、学生の受講実態（学生のICT環境、オンデマンド授業の受講時間帯、リアルタイム双方向型での学生の作業履歴など）を分析するとともに、受講後アンケートを実施し、感想、要望、課題などを挙げてもらい、オンライン授業の授業形態（オンデマンド型、双方向リアルタイム型）、授業の進め方、学生への接し方など教育効果の高いオンライン授業の運営を検討する。本課題について昨年度実験を進めるべく準備していたが、研究協力への参加者が見つからず断念した経緯がある。そこで、募集時期、学生への周知方法、模擬授業の実施計画などを再検討し、昨年度できなかった実験調査を実施する。

模擬授業は正課授業とは無関係のもので、本研究の実験用として次の授業形態を用意し、各授業のアンケート結果を比較する。まず、教員が学生に一方向的に講義し、途中でグループディスカッションなどを行わないいわゆる座学の授業については、双方向性を必要としないためオンデマンドでの授業展開で十分であると考え。そこで、座学形式の授業としては、提供するコンテンツの種類によって、資料ベースのもの、資料+音声解説、教員が顔出しして面接授業と同じ形態の授業を撮影したもの3種類を比較する。またグループワークやグループディスカッションなどアクティブラーニングを伴う授業についてはオンデマンドでの授業展開は難しいため、Web会議システムを用いたリアルタイム双方向型で行う。すなわち次の4展開での模擬授業を実施する。

- ・オンデマンド型授業（各60分程度）
 - －PDF資料のみを用いた授業
 - －資料+音声による説明動画を用いた授業
 - －教員が顔出しして説明する動画を用いた授業
- ・リアルタイム双方向型授業（80分程度）
 - －受講者間のグループディスカッションやプレゼンテーションを含んだ授業

座学の授業はLMSに授業コンテンツを設置しオンデマンド形式で、アクティブラーニングはZoomを使ってリアルタイムで受講してもらう。各模擬授業終了時にアンケートに回答してもらい、受講の様子や学生の意見を鑑みて、よりよきオンライン授業の運営方法を検討する。また、オンライン授業においてアクティブラーニングの導入は可能かどうかについて授業設計・授業実践・検証を行う。

4. 研究の主な成果

(1) オンライン授業運用についての他大学の情報収集と分析

前述の『教育機関DXシンポジウム』について、2020年度は29回のオンラインシンポジウムが開

催され、引き続き2021年度には19回（第30回～第48回）のオンラインシンポジウムが開催された。

教育機関DXシンポジウムアーカイブ（<https://edx.nii.ac.jp/>）には過去発表のアーカイブ動画の視聴や資料の入手ができる。またアーカイブはカテゴリ分類されており、カテゴリ別に発表を検索することもできる。昨年度（第30回～第48回）のカテゴリ別発表数内訳は次の通りである。なおカテゴリは同アーカイブのものを用いる。ただし、発表のうち挨拶やフリーディスカッションについてはカウントから除いている。また、1つの発表に複数のカテゴリタグが付与されているものもあるため、重複してカウントされているものもある。

表 1 「教育機関DXシンポジウム」カテゴリ別発表内訳（第30回～第48回）

カテゴリ	発表数	カテゴリ	発表数
オンライン授業	16	海外事例・国際交流	20
ツール環境	32	政策・著作権	15
ハイブリッド	7	ラーニングアナリティクス・LMS	14
教育データ	20	評価・試験	5
さまざまな授業	7	さまざまな課題	5
新型コロナウイルス感染症対策	19	初等中等教育・高専	17
サポート体制	8	医療・看護教育	5
学生の声	18	アンケート調査	16
業務DX	17	図書館	0
コミュニケーション・合理的配慮	9	高等教育・人材育成	14
授業設計	18		

オンライン授業の運用そのものについての発表は2020年度に比べて少なくなっており、オンライン授業に関するツール開発やTeamsなど既存ツールの活用、教育DXなど具体的なツールの紹介などが多いと感じられた。また最近ではVRやメタバースを用いて教育空間を実現するといった取り組みも見られ、同シンポジウムの中でアバターを用いた仮想空間ミーティングの実践が行われたこともあった。

（2）オンライン模擬授業の実施調査

A) 実験準備

昨年度、同様の実験内容について本学研究倫理審査を受けて承認されていたので、今年度は2021年11月に同実験について研究期間延長申請を行い、それが承認された後、学内にポスターを貼りだして研究協力者の募集を行った。研究協力者としては当初20歳以上の学生8名を想定していたが、昨年度同様に応募者が少なく、応募期間を延長するなどして最終的に5名の研究協力者を得ることができた。応募者はすべて本学4年生であり、人間社会学部2名、看護学部3名であった。2022年3月3日に研究協力者へ事前説明会を行い研究協力への承諾書をいただいた上で、2022年3月7日～9日でオンデマンド型模擬授業を、同月14日にリアルタイム双方型模擬授業を実施した。

B) オンデマンド型模擬授業の実施

オンデマンド型の模擬授業は3種類用意した。2022年3月7日にPDFの文書資料だけで行う授業（内容は「プログラミング教育必携化」）、3月8日に音声付きPowerPointスライドを用いた授業（内容は「AIについて」）、3月9日に教員が顔を出して解説を行ったものをカメラで録画した動画を用いた授業（内容は「VRについて」）と1日1回の模擬授業を3日間受講してもらった。受講者は前述の研究協力者5名である。

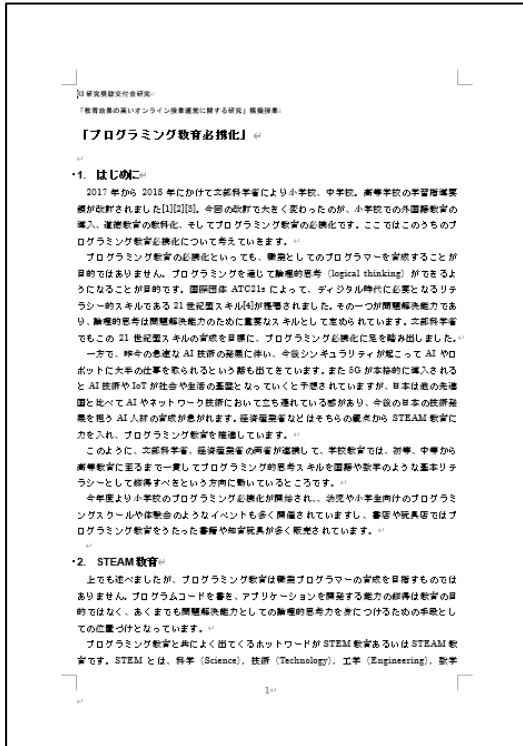


図 1 模擬授業コンテンツ (PDF資料)

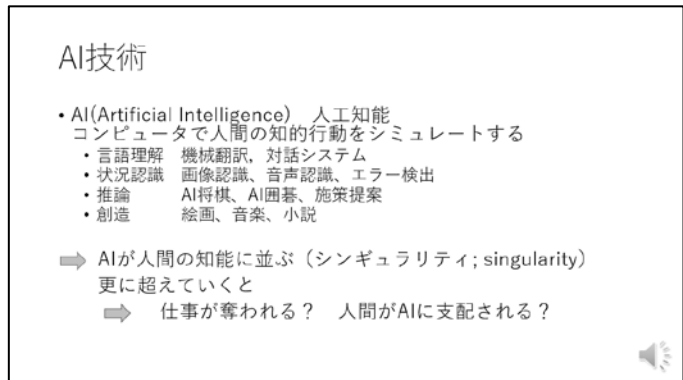


図 2 模擬授業コンテンツ (音声付きスライド)



図 3 模擬授業コンテンツ (教員による顔出し動画)

オンデマンド型模擬授業は本学LMSで展開した。当該日の9:00に研究者が資料をLMSにアップロードし、研究協力者は当日中であれば自分の好きな時刻に模擬授業をオンラインで受講してよいものとした。模擬授業の内容は前述のとおり「プログラミング教育必携化」「AIについて」「VRについて」であり、正課授業で教えていないテーマを選び、事前知識を必要としないでも問題なく受講できるように各コンテンツを用意した。1回の実験時間は、模擬授業40分、確認レポート10分、アンケート10分の60分相当とした。ただしPDF文書資料で行う模擬授業のPDF資料については40分相当の授業で教える程度の分量を想定して作成した。なおオンラインの受講のため、研究協力者が実際に模擬授業を受講したかどうかを研究者側では直接確認できないため、研究協力者には受講後に模擬授業の内容に関する簡単な課題を確認レポートとして提出してもらうこととした。ただしこの確認レポートはこちらが研究協力者の受講を確認するためのもので分析対象外である。また、研究協力者には受講後アンケートを実施した。アンケートはLMSのアンケート機能を用いて実装した。な

お、アンケート内容は次の通りである。

表 2 模擬授業アンケート内容

1. 本形式の授業を受講するにあたり、使用するアプリケーション等の実行や操作が難しかったですか？ (簡単だった／どちらかといえば簡単だった／どちらでもない／どちらかといえば難しかった／難しかった／実行できない場面があった)
2. 本形式の授業を受講して、内容の理解はどうでしたか？ (理解しやすかった／どちらかといえば理解しやすかった／どちらでもない／どちらかといえば理解しにくかった／理解しにくかった／受講できなかった)
3. 本形式の本授業を受講して、教員とのコミュニケーションは十分取れましたか？ (十分取れた／ある程度取れた／どちらでもない／あまり取れなかった／まったく取れなかった／取る必要性を感じない)
4. 本形式の本授業を受講して、他の受講者とのコミュニケーションは十分取れましたか？ (十分取れた／ある程度取れた／どちらでもない／あまり取れなかった／まったく取れなかった／取る必要性を感じない)
5. 本形式の授業を受ける上で、学習環境（受講場所の周囲の環境、パソコンなど情報機器、ネットワーク等）において問題やトラブルはありましたか？あった場合はその内容をお教えてください。（自由記述）
6. 本形式の授業について、受講者の立場から悪かったと思われる点はなんですか？（自由記述）
7. 本形式の授業について、受講者の立場から悪かったと思われる点はなんですか？（自由記述）

C) オンデマンド模擬授業に関するアンケート結果

受講後アンケートの各項目の結果を示す。サンプル数N=5と少ないためあくまで参考程度ではあるが、おおよその傾向を見ることが出来るものと考えられる。

表 3 設問1：本形式の授業を受講するにあたり、使用するアプリケーション等の実行や操作が難しかったですか？ (N=5)

選択肢	PDF	音声付 スライド	動画
簡単だった	5	3	3
どちらかといえば簡単だった	0	1	1
どちらでもない	0	0	0
どちらかといえば難しかった	0	1	1
難しかった	0	0	0
実行できない場面があった	0	0	0

すでに正課授業等でオンライン授業の経験があるため、操作については概ね問題はないようである。音声付スライド、動画の視聴について「どちらかといえば難しかった」という意見が1名いたため、授業初回時には学生が確実に受講できるかどうか確認を取った方がいいと思われる。

表 4 設問2：本形式の授業を受講して、内容の理解はどうでしたか？ (N=5)

選択肢	PDF	音声付 スライド	動画
理解しやすかった	1	0	2
どちらかといえば理解しやすかった	3	5	3
どちらでもない	0	0	0
どちらかといえば理解しにくかった	1	0	0
理解しにくかった	0	0	0
受講できなかった	0	0	0

内容理解については、おおよそPDF、音声付スライド、動画の順に理解度が高くなるとみられ、文章情報だけよりも音声情報が含まれた方が理解度が上がることが窺える。さらに同じ音声説明でもスライド資料だけよりも教員が顔を出して説明した方が理解度が上がるとあり、教員の身振り手振りなどnon verbalな情報も学生の理解度に効いていると推測できる。

表 5 設問3：本形式の本授業を受講して、教員とのコミュニケーションは十分取れましたか？ (N=5)

選択肢	PDF	音声付 スライド	動画
十分取れた	0	0	0
ある程度取れた	0	0	2
どちらでもない	1	2	1
あまり取れなかった	1	1	1
まったく取れなかった	3	2	1
取る必要性を感じない	0	0	0

オンデマンド型であるため教員とのコミュニケーションは取れないと予想していたし、実際、PDF、音声付スライドについてはどちらでもないあるいは取れていない方に回答が傾いていたが、動画については2名が「ある程度取れた」と回答しているのが興味深い。なお3回の模擬授業とも授業内容等への質問が来たり、教員がそれに答えたりといったやりとりはなかったことを記しておく。教員の顔が見えるということで、ある程度のコミュニケーション意識が得られるということなのかもしれない。

表 6 設問4：本形式の本授業を受講して、他の受講者とのコミュニケーションは十分取れましたか？ (N=5)

選択肢	PDF	音声付 スライド	動画
十分取れた	0	0	0
ある程度取れた	0	0	0
どちらでもない	0	0	1
あまり取れなかった	1	1	1

まったく取れなかった	3	3	2
取る必要性を感じない	1	1	1

研究協力者各自がオンデマンド教材で受講するため、こちらについては予想通り受講者間でのコミュニケーションは取れないという回答であった。また「とる必要性を感じない」に1名ずつ回答があった。

「設問5 本形式の授業を受ける上で、学習環境（受講場所の周囲の環境、パソコンなど情報機器、ネットワーク等）において問題やトラブルはありましたか？あった場合はその内容をお教えてください。」についてはトラブルがあった対象者はなかった。

「設問6 本形式の授業について、受講者の立場からよかったと思われる点はなんですか？」については、5名とも「好きな時間に好きな場所を選択して受講できること。」に類する回答をしており、受講時間や場所にとらわれないことがメリットであると感じているようだ。PDF形式においては「レポートを書く際に、レジュメを確認し、復習しながら書くことができるため、授業内容が定着しやすいと感じました。」という意見もあった。音声付スライド形式においては「先生の説明が音声としてあるのでわかりやすい。資料だけよりは音声アリの方が音声があるので受講している実感がある。」など、音声解説がある方が理解が進むという意見が多かった。またPDFと同様に「すぐに理解できなくても、音声を聞き返したり、PowerPointを見返したりできるのは、良い点だと思います。」という意見もあった。教員の顔出し動画形式においては「動画があることで、先生の身振り手振りをみることができ、今日の講義のような内容では理解のしやすさの向上につながるのではないかと感じました。」に類する意見が多く、やはりnon verbalな情報により、より理解が進むのだと考えられる。

「設問7 本形式の授業について、受講者の立場から悪かったと思われる点はなんですか？」については、どの形式でも「他の人とコミュニケーションがとりづらい。」「自分の理解が明確でない時に、助言を得にくい状況だったこと。」「いつでも受講できるため後回しにしてしまう」などの意見があった。また「目が疲れてしまう。」などコンピュータの使用そのものに対する意見もあった。音声付スライド形式では「前回の授業（文献のみ）と比較して、復習の際に音声を聞かないといけないため時間がかかる。」といった復習時の不便さについての意見があった。また教員の顔出し動画形式では「パワーポイントを自分で印刷または別で表示しないと見えにくかった点。」と板書やプロジェクタ投射に関する撮影テクニックの問題も指摘された。

「設問8 本形式の授業を実施するにあたり、改善すべきところや要望があればお教えてください。」については「正課の授業の際は、受講者からの質問に資料上で答えたり、他の受講者の感想を紹介したりすることで、学習効果の向上や、新たな目のつけどころを見つけることにつながるのかもしれないと感じました。」と他の受講者とのつながりを如何に設けるのかが課題であることが分かった。その他「強調したい内容やよく理解しておくべき内容の部分はアンダーラインなどの印があるとより学習しやすいと感じた。」といったオンラインとは直接関係ない部分での指摘もあった。

「設問9 上記以外で本形式の授業を受講した上での、自由な感想をお聞かせください。」においては、PDF形式において「今回の授業内容に関しては、PDF資料での授業でもある程度理解ができたので、内容や難易度などによって授業形式の使い分けを行う必要があるのではないかと感じました。」「これくらい手軽に学習できるのであれば、専攻する学部以外の授業で興味がある内容の講義を受けやすいのではないかと感じました。」、音声付スライド形式において「音声解説により、理解がしやすくなる場面も多かったですが、昨日のPDF資料による授業には、読み返しがしやすい

という良さもあり、どちらの方が良いというのは一概には言えないと感じました。」、教員の顔出し動画において「直接授業を受けている形式に近い上に、自分の好きな時間・場所で受講できるため一番理解しやすかったです。」「パワーポイントに音声がついた授業とあまり変わらないと感じた」といった感想があり、授業内容等によってもどの形式も一長一短があると感じた。

D) リアルタイム双方向型模擬授業の実施

2022年3月14日13:00～14:20にZoomを用いて80分のリアルタイム双方向型のオンライン模擬授業を実施した。内容は「コミュニケーションに必要な要素を考えるオンラインによるアクティブラーニング」である。受講者はオンデマンド模擬授業と同じ5名の研究協力者である。ホストである研究者は福岡県立大学4号館3階の健康学習室でZoom会議を開催し、受講者5名は自宅あるいは情報処理教室で各自Zoomに入ってもらい受講することとした。また授業目標として以下を設定した。

- (1) 「コミュニケーション」の要素についてオンラインにてPBL (Project Based Learning) を援用した能動的学習を体験するなかで主体的に学ぶとは何かを理解する。
- (2) 「コミュニケーション」の要素について、とくに非言語的コミュニケーションの体験から「言葉」の重要性を考える。
- (3) グループワーク (Zoomブレイクアウトセッション) やプレゼンテーション (Zoom) での表現を通して言葉で伝えることと伝えることの重要性について理解を深める。
- (4) 対人援助にとって必要なコミュニケーションの要素 (とくに「間」) についてその基礎を学ぶとともに学習の動機づけになる。

模擬授業の授業展開は次の通りである。

時 間	内 容	備 考
13 : 00 ～	研究の説明と同意	事前に配布した研究計画書、同意書等を用いて説明し、同意を得た上で実施する。得られない場合は授業への参加を辞退していただく。
13 : 10 ～	授業導入 (アイスブレイク)	WS① : A4用紙を三つ折りにして下記を記入 (上段に本名、中段に今日呼んでほしい名前、下段に私の好きな漢字) ※Zoom表記もその名前に変更 WS①を用いて ・自己紹介 (上段と中段) ・表現 (非言語コミュニケーション)
	グルーピング (ブレイクアウトセッション)	・グループ作成 (2名×2グループ)
13 : 15 ～	PBL (Project Based Learning) テーマ : 「コミュニケーションに必要な要素～伝えることと伝えること～」について各グループでディスカッション	テーマの意図説明とグループワークの展開方法を説明する。
	グループワーク① : 各個人から出された要	グループ内自己紹介等

	素について、グループ内でさらに抽象的なキーワードを命名していく。	・進行、書記等（複数名ずつでも）を決める ワークの例示：グルーピング（抽象化）を身近なもので例示しながらグループワーク（前半部分）の進め方の枠組みを体験する。
13：25～	グループワーク②：キーワードに順位をつける	
13：30～	グループワーク③：1位のキーワードをテーマに、「必要な理由（現状・背景）」「問題点（欠点・利点）」「提案（どうすればいいか）」についてディスカッションを行う。テーマ設定は「提案型」とし、その要素を身につけるためには何が必要かという視点で展開。	WS③（グループワーク）：3つの枠組みを進められているか 疑問や質問に対しては、その方法や説明などの方法は教えず、「どう考える」「どうすればいいと思う」など『問い』で返す。もちろん生徒の発言も必ず承認したうえで、「他には・・・」と深めていく。
13：40～	グループワーク④：グループワークの内容をまとめる（パワポもしくは手書き）。	項目ごとにまとめる（可能であればパワポで作成）
13：45～	プレゼンテーション： 各グループのまとめを発表（各グループ3分以内）	2グループ×5分（入れ替わり、ピアレビュー時間含む）＝10分
	ピアレビュー： プレゼンテーションを聞きながら、「よかったところ」「こうすればもっと良かったのに」の2つの観点からピアレビューを行う。	WS④にそれぞれの観点から評価を行い書き留めておく。
13：55～	ピアレビューの共有： ・ピアレビューコメントの全体共有 ・各グループでコメントを共有する。（グループクロージング）	ピアレビューのコメントは、受講者の公表度合いにより、ビデオ付き音声、音声のみ、チャット機能での全体へのコメント、チャット(プライベート)機能では教員の読み上げなどで対応し共有する。
	ミニレクチャー： 「コミュニケーションに必要な間（空間・時間）～伝えることと伝わること～」	本日のPBLのテーマや成果を拾い上げながら担当者が伝えたいキーワードについてミニレクチャーを行う。
14：10	研究参加アンケート	

～		
～14:20	終了	

受講後オンデマンド模擬授業と同様に本学LMSでアンケートに回答してもらった。アンケートの設問内容はオンデマンド模擬授業と同じもの（表 2）である。

E) リアルタイム双方向型模擬授業に関するアンケート結果

受講後アンケートの各項目の結果を示す。

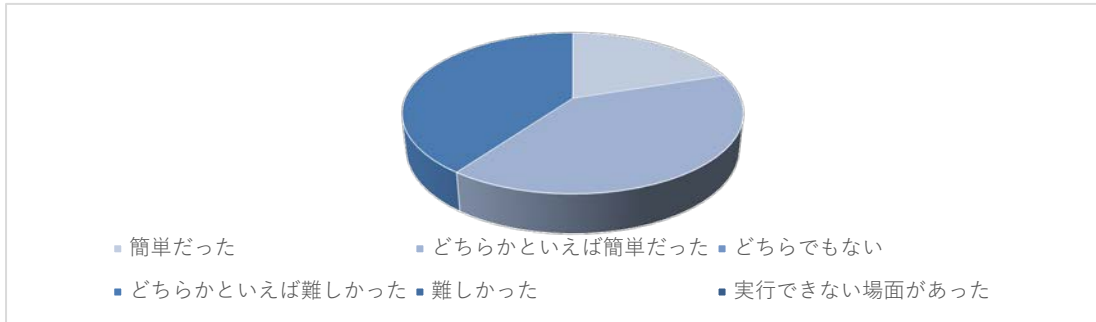


図 4 設問1：本形式の授業を受講するにあたり、使用するアプリケーション等の実行や操作が難しかったですか？（N=5）

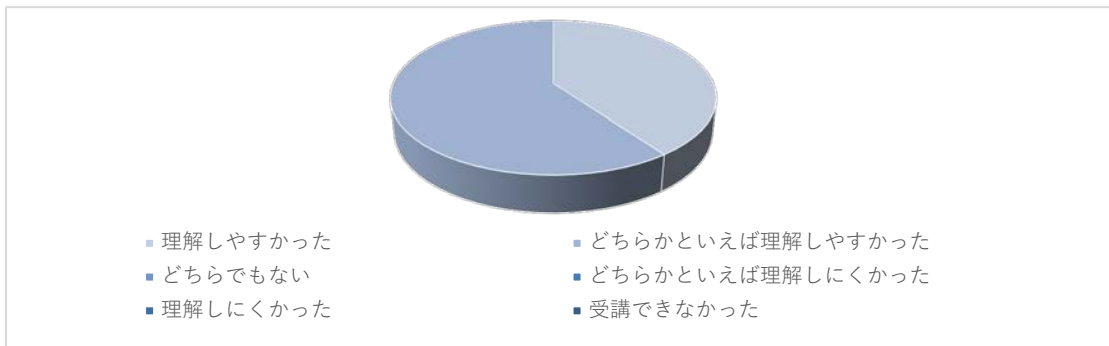


図 5 設問2：本形式の授業を受講して、内容の理解はどうでしたか？（N=5）

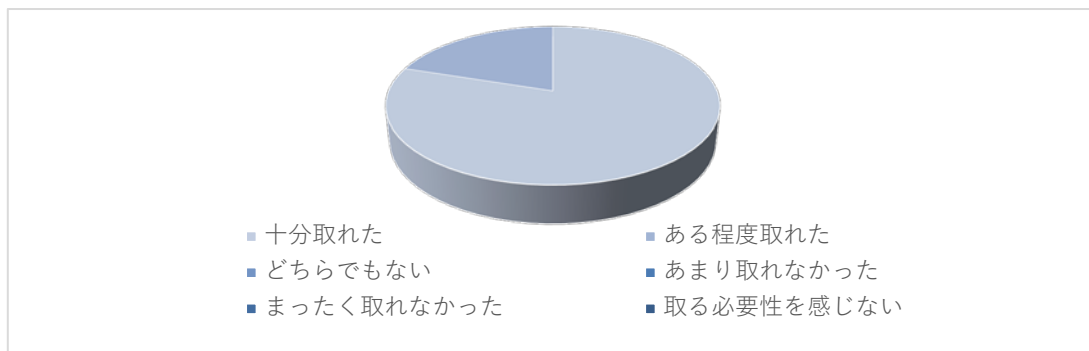


図 6 設問3：本形式の本授業を受講して、教員とのコミュニケーションは十分取れましたか？（N=5）

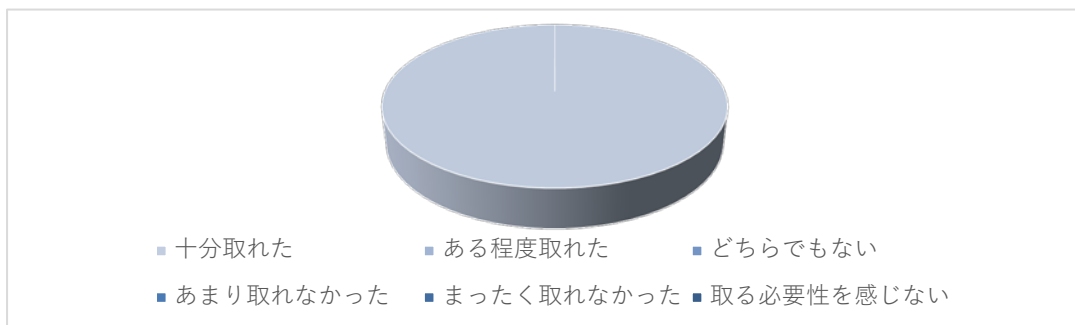


図 7 設問4：本形式の本授業を受講して、他の受講者とのコミュニケーションは十分取れましたか？（N=5）

設問5：本形式の授業を受ける上で、学習環境（受講場所の周囲の環境、パソコンなど情報機器、ネットワーク等）において問題やトラブルはありましたか？あった場合はその内容をお教えてください。

・回答なし

設問6：本形式の授業について、受講者の立場からよかったと思われる点はなんですか？

- ・グループワークをやったことで、新たな発見があった。
- ・他の受講生とのディスカッションをすることで、自分で考えられなかった意見が出てきて新鮮味があった。
- ・他学部との交流によって思考の視野が広がったこと。他学部との交流がはかれて友人が増えた。
- ・教員や他の受講生とコミュニケーションをとれる点。
- ・教員や学生とのコミュニケーションをとれたことが最も良い点だと思います。今回は、グループワークを取り入れた授業ということで、他の参加者の方の発想やPowerPointのまとめ方について、非常に勉強になる部分が多かったです。双方向型なので、自分の発表後に他の参加者や先生からのコメントを頂くことができるのも、良い点だと思います。大学に行かずに授業を受けられることも、感染症対策の面では良い点だと思います。

設問7：本形式の授業について、受講者の立場から悪かったと思われる点はなんですか？

- ・90分という短い時間では、パワポ作成と発表までは難しかった。
- ・もう少し時間をとって話し合いができたなら良かったと思った。
- ・今までの授業に比べて、労力は必要だったと感じた。体調が悪いなどの影響も出やすい形式だと感じた。
- ・zoom内でパワポのデータを共有するなどの操作が難しく時間をロスした点。対面に比べ、パソコンを見続けるため、目や頭の痛みにつながる点。
- ・対面授業では、パソコン操作や紙にまとめるといったことを複数人で行うことができますが、Zoomだとどうしても一人にPowerPointの入力などの負担が集中してしまうので、申し訳なく感じる部分はありました。授業準備（Zoom受講のための部屋の片づけ、Zoomの準備など）に時間がかかってしまう部分はあると思います。

質問8：本形式の授業を実施するにあたり、改善すべきところや要望があればお教えてください。

- ・今回くらいの少人数の方が和やかに進められて発言しやすいと感じた。
- ・今回は模擬授業でしたが、実際の授業では、事前もしくは授業のはじめに講義資料を閲覧できる状態になっていたら、スライドを見逃したところを確認し直すことができるので、より理解がしやすくなるのではないかと思います。

質問9：上記以外で本形式の授業を受講した上での、自由な感想をお聞かせください。（自由記述）

- ・少人数のリモート授業は発言がしやすかった。
- ・グループワークは疲れるけど、その分得るものは大きいなと感じました。看護学部は特に1年生の時しか他学部との交流がないので、このような機会があると学部に関わらず友人関係を広げることができていいなと感じました。
- ・知識を得るインプットと、自分の意見を表明するアウトプットは、両方大事なことだと思うのですが、オンデマンド型の授業では、どうしてもインプットに偏ってしまう部分があると思うので、リアルタイム型で他の受講生とグループワークを行い、アウトプットを行う経験を積むことのできる今回のような授業が、積極的に展開されるべきだと感じました。他の受講生の発想やセンス、発表の仕方から学べることも多く、こうした学びがあることが大学の良い点だと思うので、学生同士がコミュニケーションをとることができるような授業を、コロナ禍で以前とは異なる学生生活を送っている後輩の方々にもぜひ受けられるようにしてほしいと思います。

アクティブラーニング担当研究者の増满是、今回の計画のプレ実施ともいえる同様の方法を先述の通り高校生向けに実施し、高校生からは高い評価を得ていた。その授業リフレクションを通してさらにそれをより深化したものとして教案を作成し授業を展開した。

今回、参加者が少数であったものの、また4年生ということからもコミュニケーション力の高さや他者との共同作業でも臆することなく発言できることなどで、時間的な制限はあるものの一定の効果を確認することができた。

一方で、本研究目的とは直接関係ないが、自由記述にあるようにオンラインだからその学年を超えた、もしくは低学年からの本テーマのような授業の展開・実施の必要性が示唆された。

今後も日々の教育活動の中において、一方的な授業の展開ではなく、学生の反応や声を反映し、より学習効果の高い、学生の「知りたい」「学びたい」「身につけたい」「成長したい」などの「たい」を引き出す教育方法の展開と教材化も同時に進めていく必要があると考える。

5. 主な発表論文等

研究テーマ（2）については調査結果をまとめて福岡県立大学人間社会学部紀要に投稿予定である。

6. その他の研究費の獲得

なし